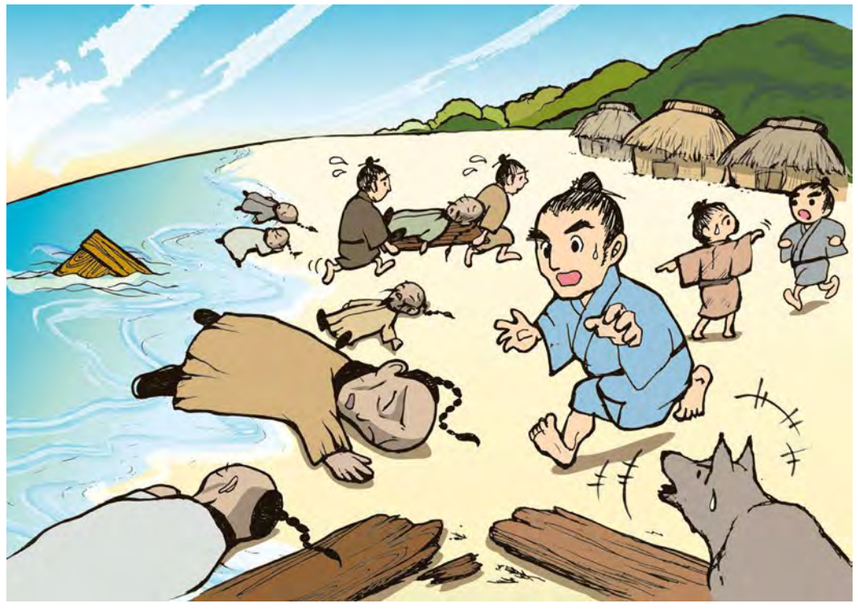
仲泊唐人墓碑ものがたり



むかしむかし、沖縄が琉球（りゅうきゅう）とよばれていたころのお話です。

十二月のある日、現在の恩納村仲（おんなそんなか）泊（どまり）の海岸に、六人の見なれない人々が流れ着いているのを地元の人が見つけました。すぐに役人へ知らせて、救助しましたが、生きていたのは一人だけでした。

解説

- 沖縄県はかつて「琉球」と呼ばれた独立国で、近隣の中国や朝鮮、東南アジアなどの諸外国や地域との交流を通して独自の歴史・文化を築いていました。
- この物語の中国人たちが漂着したのは、一八二四年（中国の年号では道光（どうこう）四年）十二月六日で、場所は現在の恩納村仲泊でした。
- この漂着事件については、『歴代宝案（れきだいほうあん）』という、琉球と諸外国の間の外交文書を書き写した記録の中に記載されています。
- 具体的には、①琉球から中国宛て、漂着者からの聞き取り内容や琉球での様子を報告し、琉球が用意した護送船に乗せて送り届けることを知らせる文書（一八二五〔道光五〕年三月十日：宝案二－一四〇－一一）、②中国から琉球宛て、護送船が無事福建に到着したことを知らせる文書（一八二六〔道光六〕年五月三日：宝案二－一四一－一五）、③琉球から中国宛て、中国側の報告を受領したことを知らせる文書（一八二六〔道光六〕年八月一三日：宝案二－一四三－〇八）等、合計八通からなる琉球と中国との間で交わされた往復文書があります。

H. Takaka

地元の人々は、生き残った一人を看病しました。おかゆを食べさせ様子を見ていると、だんだん元気を取り戻し、何が起こったのか話しはじめました。彼は、呂正という名前の中国人で、亡くなった五人は、呂孝、呂春、洪貴、呂仁、胡明という名前だと言いました。話を聞いた地元の役人は、亡くなった五人のお葬式をして、丁寧に弔いました。そして、お墓をつくって、名前を刻んだ墓碑を建てました。

解説

・琉球人以外の者が漂着した場合、各地方においては、地元民はその事実を速やかに番所（現在の町村役場に相当する）に届け出、首里王府へ報告する義務を負っていました。

清考
墓
H.Takako

呂正の話によると、彼は中国の福建省の出身で、五月のある日、仲間とともに船に乗って、商売をするために台湾にむけて出航したそうです。船には、呂正を含めた三十二人が乗っていました。

解説

・呂正たちの出身地である「福建省泉州府同安県」は、泉州府の中でも海に面した、古くから造船業と貿易業で知られた町でした。彼らの中には、中国沿岸の港を頻繁に行き来する遠隔地貿易に従事する商人が数多くおり、その結果、海難事故に遭遇する確率も他の省に比べ多くなったのでした。

H.Takako

まず、台湾に行ってお米を買ったあと、天津府に行って乾燥ナツメを買い、山東省に行きました。そこでもいろんな品物を売ったり買ったりして、十一月の始め頃、たくさんの荷物を船に乗せて、みんなで福建省へ帰ることにしました。

解説

・東シナ海を隔てて位置している琉球と中国との間には、数多くの船が行き交っていました。琉球から中国へ派遣された進貢船や、中国から琉球へ派遣された冊封船など国を行き来する船のほか、中国国内沿岸の港を往来する商船や、琉球国内の先島から首里へと向かう貢納船など、様々な人やモノが海上を行き交いました。気象予報や航海技術が現代ほど発達していない当時、国内の移動を目的とした航海であっても命がけの旅となりました。

てん しん
天津府
山東省
さん とん
琉球
りゅうきゅう
ふっ けん
福建省
台湾
たい わん
H.Takako

ところが、突然強い風が吹き、海が荒れ、嵐がやって来ました。船は海に沈んでしまい、呂正も海に投げ出されてしまいました。呂正は少しだけ残った漢方薬のにんじんとお米を持って、生き残った五人の仲間と一緒に、水櫃という雨水を貯めるための大きな桶のようなものに乗り込みました。

呂正たちは、数日海を漂い、ついに食料もつきて、みんな次々と弱っていきました。呂正もひどく衰弱し、やっと海岸に流れ着いたということでした。

解説

- 「漢方薬のにんじん」：原文では、「人参」と書かれており、当時、漢方薬として幅広く使用されていた高麗人参を指すと思われます。
- 六人が乗り込んだ「水櫃」は、船の甲板に設置された飲み水を貯めるための水桶（給水タンクのようなもの）です。恐らく、船から海に放り出された際、「水櫃」を救命ボート代わりに使用したものと思われます。『歴代宝案』にはこのように「水櫃」を救命ボート代わりに使用して命拾いした事例を複数件確認することができます。

〔水櫃のイメージ図〕

H.Takako

その後、呂正は、自分の国に帰るまでの間、琉球に流れ着いた外国の人びとが保護される宿泊所で過ごしました。そこは現在の那覇市泊にあって、呂正の他にも琉球に流れ着いた中国人たちがいました。

呂正は、毎日お医者さんの治療を受けて、ご飯やお酒、衣服をもらって過ごしました。

解説

- 当時、琉球は中国（清朝）皇帝から冊封を受け（国王を承認・任命してもらうこと）、その庇護の下に置かれていました。一六八四（康熙二三）年八月、左記の命令が琉球を含むアジアの朝貢国に下されました。

「この度、これまでの民間の海外貿易禁止令を解除したので、中国各省の多くの民間人が船を出し貿易するようになった。そこで、中国周辺の国々の国王に対し、それぞれ沿岸の地方官に命じて、もし中国船が漂着した際には、速やかに保護して帰国させるようにせよ」

今回の漂着事件に対して、琉球側が速やかに対応出来たのは、中国との間にこのようなルールが存在していたことも関係しているのです。

- 当時、中国や朝鮮からの漂着者は、漂着地から那覇の泊村（現在の沖縄県那覇市泊）へ送られました。そこでは、用意された宿泊所（仮小屋）へ収容され、帰国するまでの間、首里王府の管理下におかれ、衣類や食事の提供を受けたり、医者の治療を受けるなどして過ごしました。

- 「琉球交易港図屏風」（浦添市美術館所蔵）の泊村部分には、漂着者を収容する施設の様子が描かれています。

↓琉球王国交流史デジタルアーカイブ
交流史デジタル画像庫　参照

医療
宿泊所
食事
衣服
謝謝
薬膳
H. Takako

そして、翌年の三月、呂正は、泊の宿泊所で保護されていた他の中国人たちと一緒に無事にふるさとへ帰ることができました。

呂正は帰国後何を思ったのでしょうか。

墓碑は今でも「唐人墓の墓碑」という名前で仲泊の地に残っています。

おしまい

解説

・呂正が琉球へ漂着したちょうど同じ時期、別の漂着事件も発生していました。呂正と一日違いの道光四年十二月七日、広東省出身の商人蔡高泰ら一行（二十二名）の船が伊是名島に漂着、運天港を経て、泊村まで護送されてきました。彼らの証言内容からも、恐らくこの二隻の船は、同じ暴風の被害に遭ったものと思われます。呂正たち一行の生存者一名のみに対して、蔡高泰らは二十二名全員が生き残っています。この二隻の明暗を分けたのは一体何だったのでしょうか。授業の際、このようなエピソードにも触れると、児童の興味関心を引きつける効果が期待できます。呂正は蔡高泰ら一行と共に護送船で帰国の途に着きました。

・墓碑には彼らの出身地、死亡した日付（漂着した日）が刻まれていますが、その他にも、この墓碑に刻まれている内容には、死亡した人物と呂正との関係を知るための手がかりがあります。というのは、墓碑に刻まれた中央の人物、呂孝の名前の上に「清考」の文字があります。「清」は清国のことですが、その時代、子が父親の墓碑を建てる際、父親の名の上に尊称として「考」や「先考」を加える習慣がありました。つまり、この墓碑から呂孝は呂正の父親であったことが分かるのです。

＊墓碑は実際には琉球側が建立したものです。

・「唐人墓の墓碑」は現在、恩納村指定文化財として、恩納村博物館前の広場の一角に残されています。呂孝たちの墓は、戦後、米軍による道路拡張により壊され、墓碑のみが残り、現在の場所に移設されました。

「唐人墓の墓碑」恩納村

中国
福建省
墓
琉球
H.Takako

仲泊唐人墓碑ものがたり